宮川ひろ＝作

# ケヤキの下に本日開店です

山中冬児＝絵

# 本日開店です

山中冬児＝絵

NDC●913
みんなの文学＝1
174P ／22cm

書名●ケヤキの下に本日開店です
作者●宮川ひろ©
画家●山中冬児
発行●株式会社金の星社
〒111 東京都台東区小島1－4－3
電話・03(861)1861
振替・東京0-64678
印刷●平河工業社
製本●東京美術紙工
初版発行●1980年8月
コード番号●8393－062011－1406

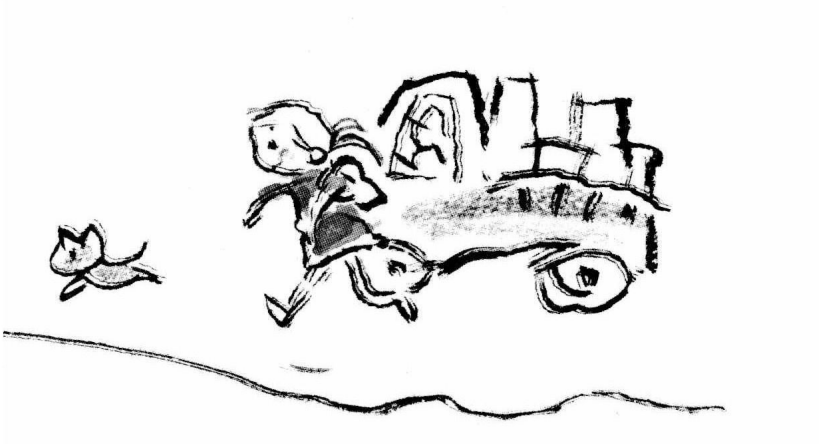
乱丁落丁本は，ご面倒ですが小社営業部宛ご送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

## はじめに

おばあちゃんは
六十歳のたんじょう日に
大へんなことを発表しました。
おとうさんもおかあさんも
はんたいだけれど
ぼくはさんせいです。
おうえんします。

●ケヤキの下に本日開店です／もくじ

プレゼント　7
たんじょういわい　20
おばあちゃんのゆめ　33
開店　47
先生づら　63
おつかいコンクール　74
まねきねこ　85
たまりば　99
雨の日　111
地図　123



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

赤ちゃん 137
青空よせ 147
さよなら 158
あとがき 173

⇒著者紹介⇐

**●宮川ひろ**

群馬県に生まれる。金華学園卒業。現在「びわの実学校」同人，日本児童文学者協会員。教諭経験を活かした作品が多く，温かい作風で幅広い人気を博している。

〈著書〉『夜のかげぼうし』(赤い鳥文学賞受賞)『四年三組のはた』『先生のつうしんぼ』『春駒のうた』『一年生っていいね』など多数ある。

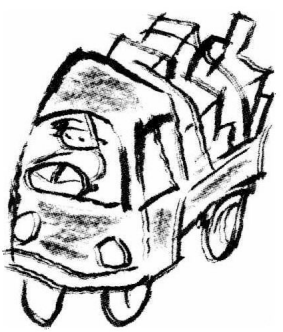
**●山中冬児**

1920年，大阪に生まれる。中之島洋画研究所に学ぶ。現在，日本美術家連盟会員，児童出版美術家連盟所属。やさしさあふれた画風で絵本，児童書を中心に活躍している。

〈著書〉『ふうたのゆきまつり』『東京からきた女の子』『1ねん1くみのしらゆきひめ』『たけのはさやさや』など多数ある。

# ケヤキの下に本日開店です

宮川ひろ＝作
山中冬児＝絵



# 1　プレゼント

三月になって、はじめての土曜日です。

きのうはもう、春のようにあたたかかったのに、きょうはまた冬へぎゃくもどりの、寒い日になりました。

和彦は、いつものようにひとりでおひるをたべました。おかあさんもおばあちゃんも、きょうは早く帰ってきます。

夕方までだれも帰らない日なら、とっとと、あそびにいけるのに、土曜日はどうもおちつけません。すぐにはあそびにも出られずに、テレビをみながら、だれかが帰ってくるのを、待つことになります。

和彦の家では、おとうさんもおかあさんも、おばあちゃんも小学校の先生です。

和彦の家とおばあちゃんの家は、同じやねの下にありました。玄関が公道のほうをむいているのが、おばあちゃんの家で、南がわの私道からはいる玄関が、和彦の家です。

ふたつの家は、一かいはろうかでつながっていますが、二かいはかべでくぎられていました。かいだんはどちらの家にも、ついています。

朝ごはんは、たいていべつべつにたべます。おばあちゃんはごはんとみそしる。和彦の家は、パンとスープで、このみがちがうからです。

それでも、夕ごはんは、ほとんどいっしょにたべました。

「ただいま。」



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一ばん先に帰ってきたのは、おとうさんでした。
「なんだ、おとうさんか。」
和彦は、おもわずそんないいかたをしました。
「まだ、だれも帰っていないのか。」
帰ってきたおとうさんまでが、つまらなそうにいいました。ふたりで、おかあさんたちを待つことになりました。
そのとき、電話のベルがなりました。もう時計は三時をまわっています。こんな時間にかかってくる電話は、ろくなことではありません。和彦が受話器をとりました。
「もしもし、和彦かい。」
おばあちゃんの声です。
「おばあちゃんね、お友だちとあうことになってね、夕はんはすませて帰るから、先に休んでるように、おかあさんにつたえてね。」

「そんなに、おそくなるの？」
「いや、十時ごろまでには帰るけどさ、じゃあね。」
おばあちゃんは、なんだかたのしそうな声でいうと、電話をきりました。
そこへやっと、おかあさんも帰ってきました。
「おばあちゃん、おそくなるって。夕ごはんはいらないからってさ。」
「ああそう、それじゃあ、やき肉とサラダでいい？　けさのスープも残っているし。」
おかあさんは、おとうさんにききました。
おばあちゃんがいるときは、一品はやさいのにものをすることになっていました。このやさいのにものを作るのが、おかあさんはにがてです。
「やき肉とサラダなら、ぼくたちでやろう。和彦てつだうか。まあ、

おかあさんは休んでください。」
おとうさんは、そんなふうにいって、おかあさんにお茶を、ついであげました。
「ありがとうございます。おとうさんと和彦がやさしいから、今週もぶじ仕事ができました。」
おかあさんは、すこしおおげさに頭をさげて、おいしそうにお茶をのみました。
「ねえ、おばあちゃんがるすのあいだに、たんじょう日のプレゼント、きめておかない。」
おかあさんがいいました。おばあちゃんは、三月十五日で六十歳になります。
「おかあさんに、まかせるよ。」
おとうさんは、めんどうくさそうにいいました。

「そんな、ことしはとくべつでしょう。ちょっとふんぱつして、いいものおくりましょうよ。和彦も考えて。」

おかあさんは、からだをのりだしました。おばあちゃんは、たんじょう日がすぎたら、三月いっぱいで、学校をやめることになっています。

「そうだなあ、和彦はなにかおばあちゃんのほしいもの、きいていないか。」

おとうさんは、和彦にききました。和彦は一週間のはんぶんは、おばあちゃんのところへ、とまりにいっているからです。

「きいてないけどさ、あっとおどろくようなおもしろいものないかねえ。」

和彦も本気になって、頭をひねりました。

「卒業式にきるドレスなんかはどう？　きまったように黒のスーツ

じゃなくて、四十年の教員生活のおわりをかざるような、ちょっとはなやかな色のものよ。」

おかあさんは、じぶんの思いつきをたのしんでいるみたいです。ほんとうは、おかあさんがきたいのかもしれません。

おばあちゃんはいま、六年生をうけもっています。学校をやめるときには、六年生をうけもって、子どもといっしょに卒業するというのが、おばあちゃんのけいかくでした。おばあちゃんのことしの卒業式には、いろいろないみの卒業がありました。だから、しゃれたドレスをきさせてやりたいというのが、おかあさんの意見です。

「ちょっと、はなやかなドレスか、そういうのおふくろににあうかなあ。」

おとうさんは、首をかしげました。和彦も、いつものままの、おばあちゃんがいいと思います。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com